鼻 前 庭 嚢 胞 の 1 例

太田 舜・小田春夫

A case of nasal vestibular cyst

Shun OHTA・Haruo ODA

緒 言

鼻前庭嚢胞は、Bortural¹⁾(1891)が、18才の患者の左側鼻腔底部の前下端に生じた症例を報告したのを嚆矢とし、本邦においては、久保²⁾(1920)が、1919年来の自験例6例を報告し、以来、現在まですでに100例を越える症例の報告がなされているが、歯科口腔外科領域における報告は少なく、わずかに、高橋¹³⁾(1931)、小野¹⁴⁾(1934)、横矢他⁴⁰⁾(1960)、河合他⁴¹⁾(1961)の各1例、岡田他⁴⁵⁾(1964)の3例、久野他⁴⁸⁾(1970)の2例のみであり、この分野において遭遇することの比較めまれな疾病である。

今回、著者らも同嚢胞の1例を経験したので報告する。

症 例

患者：■■■■ 53才、■■■■

写真1 術前顔貌

済生会神奈川県病院，神奈川県交通救急センター，歯科口腔外科（主任：太田 舜医長）
Clinic of Dentistry and Oral Surgery, Saiseikai Kanagawa-Ken Hospital and Kanagawa-Ken Traffic Emergency Hospital (Chief: Dr. Shun Ohta)
受付 昭和48年1月10日

初診：1972年4月■■■日。

主訴：左側鼻翼部の腫脹。

既往歴：家族歴：特記事項なし。

現病歴：1972年4月初旬、1部の疼痛と、右側鼻翼部、頬部、眼窩下縁部にかけての腫脹を来し、某耳鼻科を受診、抗生物質の投与を受けたのち、歯牙疾患を疑われ、紹介されて、われわれの外来を受診した。

現症：左側鼻翼部、頬部、眼窩下縁部に向け、軽度の漸慢性腫脹を来し、鼻翼周辺部の圧迫により鈍痛を認め、左側鼻入口部外側で下鼻甲介前方に、いわゆる Gerber 氏隆起の形成を認める。（写真 1）

口腔内所見：1、2の歯肉頬移行部に軽度の発赤と腫脹を認め、同部に波動を触知、穿刺により約 2.0ml のコーヒー様の内容液を吸引した。

MI MCr MI
↓ ↓ ↓
歯牙所見：7 6 5 4 3 2 1 | 1 2 3 4 5 6 7

上顎歯牙は、いずれも歯髄反応 vital である。（なお、1は、Crown 除去後の所見では、近遠心面ともに C₂ の状態であり、歯髄反応は、同様に vital であった。）

X線所見：口腔内X線所見では、上顎歯牙の歯根膜腔、歯槽硬線ともに、いずれも正常であり、該疾病との関連を疑わしめるような所見はみられない。また、顔面の単純X線所見では、異常を認めず、歯肉頬移行部の穿刺と同時に、吸引内容液とほぼ同量の Lipiodol ultra fluid を注入した造影所見では、左側梨状孔下部に約 1.5×1.0 cm、楕円形の辺縁平滑な造影像を認め、この像は、上顎骨の外側に位置する。（写真 2, 3）

その他、臨床諸検査に、特に異常は認められない。

診断：鼻前庭嚢胞。

処置ならびに経過：1972. 6. ■■■ 局所麻酔のもとに、嚢胞の摘出手術を行なった。すなわち、1から3の歯肉頬移行部粘膜に約 3.0 cm の切開を加え、上方に向い周囲組織を鈍的に剥離したところ、梨状孔左縁下方に線維状、赤灰色の嚢胞壁を認め、さらに、剥離を進めるに、嚢胞は、上顎骨および骨膜の外面に発生し、骨を陥凹することなく、この部位には、また、癒着を認めないが、嚢胞の上前壁は、鼻腔底粘膜と一部癒着せるため、この

写真2 X線所見

写真3 X線所見

部を切離し完全摘出を行ない、口腔創は、4針縫合し手術を終了した。

術後経過は、良好で、6カ月後の現在再発をみない。

病理組織所見：摘出物は、 $1.9 \times 1.5 \times 1.5$ cm. 赤灰色の嚢胞で、嚢胞壁の内面は、多列線毛上皮からなり、多数の杯細胞の存在が認められる。内容液は、褐色調の水溶液でコレステリンの結晶は、認められない。

写真5 組織像, 嚢胞内壁

写真4 摘出物

考 按

鼻前庭嚢胞は、Bhasker⁵⁾(1969)によれば、顎口腔領域における nonodontogenic, nonepithelial cyst の約2.5%を占めるのみであるとされているが、耳鼻科領域においては、Bartural¹⁾(1892), Zuckerkandel²⁾(1893)以来、多数の報告がなされており、本邦においても久保⁶⁾(1920)が、自験例6例の報告を行なって以来、加藤¹⁷⁾

(1936), 梅村²⁵⁾(1950) らにより統計的な報告がなされ、さらに、笹木²⁷⁾(1955) は、文献上より、本邦における1920年から1955年にわたる67例(男子, 28例, 女子, 39例)を記載した。

いま、笹木²⁷⁾の報告を敷衍し、以後の文献上より²⁸⁻⁴⁸⁾, 著者らが集録した37例, ならびに自験例の1例を加えると次のごとくである。(表1, 2, 3, 4)

すなわち年令的には、渋谷, 原田⁴⁶⁾(1965)によれば、上野の9才, 男子が、最若年であり、笹木²⁷⁾(1955)は、前川, 藤原²¹⁾(1941)の15才男子が、最も若年患者であるとしているが、前川他の症例は、嚢胞の主体が顎骨中にあることから表題どうり、球状上顎嚢胞とするのが穏当と思われる。また、最高令は、三吉³⁴⁾(1957)73才, 男子、不破²⁶⁾(1953) 75才, 女子と広汎にわたるが、20才代に最も多い。

性別では、男子41例, 女子62例と約2:3の割合で女性に多いが、Schroff¹¹⁾(1929)の60例以上の症例中、男子は、わずかに3例、あるいは、Miller and Moore²³⁾(1949)の女子に圧倒的に多いという傾向は、本邦においてはみられない。

患側については、右側に多く、両側性のものとしては、久保⁶⁾(1920) 24才, 女子, 55才, 女子の2例, 前川¹⁹⁾(1940) 47才, 女子, 久保²²⁾(1943) 29才, 女子の各1例, 郡⁴³⁾(1962) 40才, 女子, 29才, 女子の2例などがあり、また、正中部にありとするものに、林¹²⁾(1931) 27才, 女子, 菊池¹⁵⁾(1935) 30才, 男子, 稲川¹⁶⁾(1935) 26才, 男子, 河合¹⁸⁾(1936) 25才, 男子, 中島³⁹⁾(1958) 42才, 男子, 伊集院⁴²⁾(1961) 41才, 男子などがある。

大きさでは、菊池¹⁵⁾(1935) 30才, 女子の拇頭大の3~4倍, 稲川¹⁶⁾(1935) 26才, 男子の鵝卵大, 佐藤³⁰⁾(1957) 34才, 男子の3.0×4.0×5.0cm, 内容液25ml, 三吉³⁴⁾(1957) 73才, 男子の5.5×3.5×3.0cmなどが、最も大きなものであるが、拇指頭大とする者が多く、著者らの症例もこの範中に入る。

組織像については、本邦における報告例中、組織学的所見の記載が明確なもののうちでは、重層円柱上皮または線毛上皮とする者が最も多く、腺組織を有するのは、12例であり、また、杯細胞の存在を認めたとする者は、笹木²⁷⁾(1955)によれば、5例であったとしているが、その後、市原²⁹⁾(1955) 32才, 男子, 横矢⁴⁰⁾(1960) 21才, 男子の各1例に認められており、著者らの症例においても、この存在が認められた。

本症の成因について大別すれば、貯溜嚢胞説(Kofler⁵⁾(1916), 久保⁶⁾(1920), 林¹²⁾(1931))と、胎生期発育異常説(Blumenthal⁴⁾(1913), Klestadt⁸⁾(1921)があり、久保⁶⁾(1920)は、自験例の検討により、慢性刺激を受けやすい鼻底部の粘液腺排泄管が閉塞して発生したものであるとし、組織像に腺管系を認めた者に、現在でもこの支持者が多い^{29,37)}。

表1 年 齢 別									
10才以下	11~20才	21~30才	31~40才	41~50才	51~60才	61~70才	70才以上	不詳	
0	7	75	29	19	8	4	2	1	

表2 性 別

男子	41例
女子	62例
不詳	2例

表3 患 側

左側	39例
右側	42例
両側	6例
正中	6例
不詳	3例

表4 病 理 組 織 所 見

重層円柱上皮または線毛上皮	45例
単層円柱上皮	2例
嚢形上皮	12例
重層扁平上皮	5例
混合型	11例
腺組織	12例
杯細胞を認めるもの	8例

また、Brüggemann⁷⁾(1920) は、発生原因中、最も多いものとして、鼻涙管前端残遺の発育障害によるものとしながらも、次のごとき発生上の可能性を挙げている。

1. 鼻粘膜粘液腺の貯溜
2. 胎生期発育機転による障害
- a). 鼻涙管前端部よりの発生
- b). 鼻口蓋管よりの発生
- c). Stensen 氏側鼻腺よりの発生
- d). 顔面破裂の上皮よりの発生

さらに、発育異常説の領袖、Klestadt⁸⁾(1921) は、34例の胎児について検索した結果、胎生期の鼻形成に際して、内側鼻突起、外側鼻突起、上顎突起の3者の癒合の際、鼻粘膜を形成すべき外胚葉が迷入し非定型的な発育をなしたものであるとしながらも、成因の多様性を認めている。

なお、Klestadt は Stensen 氏側鼻腺よりの発生については、否定しており、Bhasker⁵¹⁾(1961) は、鼻口蓋管由来のものは、その組織像に mucouse gland と nerves をもつものの特徴とするとしているが、本症の組織像に nerves をもつものは、みあたらない。

以上のごとく、本症の成因については、なお統一された見解をみないが、1). 本嚢胞の発生部位が、多数例において顔面突起の癒合部と一致すること。2). 両側性の発生をみることがあり、3). 本嚢胞の多数例において、鼻粘膜呼吸部と類似の組織像を呈することなどより、Klestadt の説をより妥当とするものが多い。

自験例については、嚢胞壁に腺、排泄管なく、上皮は線毛上皮であり、その位置は、Klestadt の真性 Gesichtstasche

spalten cyste に一致する。

本症の診断について、特に歯源性嚢胞との鑑別が種々論ぜられているが^{2,6,9)}。

- 1) 嚢胞の主体が上顎骨の外骨膜外にあり
- 2) 嚢胞中に歯牙を含まず、また、周辺部歯根と関係なく、(歯牙は多く vital である。)
- 3) 嚢胞壁は呼吸上皮よりなり
- 4) 顔面の単純X線所見では、異常を認めず、造影撮影により、はじめて、その存在を明確にすることができる。

5) 手術に際し、嚢胞は、上顎骨面よりは、容易に剥離し得るが、下鼻道前端部の粘膜とは癒着することなどが、鑑別診断の因とされる。

なお、X線所見について、久保⁹⁾(1920)は、梨状孔内下縁は、嚢胞の圧迫のため扁平され、二重の線として暗影を呈することがあるとし、鈴木、皆川⁸⁾(1958)も同様の所見を認めているが、著者らの症例においては、前述のごとく、異常所見は認められなかった。

最後に、本症の名称については、嚢胞の成因、発生部位、病理組織学的所見などにより、種々な名称で呼ばれており、鈴木、皆川⁸⁾(1958)によれば、Zyste am Nasenflügel, Zyste am Nasen eingang, Schleimzyste des Nasenbodens, submucöse Zyste des Nasenvorhofs, Nasenvorhof zyste, Gesichts spalten cyste, 上顎粘液腺嚢腫⁶⁾, 鼻前庭外側粘膜下線毛円柱上皮嚢腫⁹⁾などであり、これらの中、Zarniko⁹⁾(1910), Blumenthal⁴⁾(1913), Döring¹⁰⁾(1928)のNasenvorhofzysteを用いるものが最も多く、本邦耳鼻咽喉科においても、近年、鼻前庭嚢腫(胞)の名称に一統された感がある。他方、歯科口腔外科よりの報告では^{40,41,45,48,49,50)}, Nasoalveolarzyste(鼻歯槽嚢胞)とするものが多いが、Thoma⁵²⁾(1969)は、最近の著書において、この名称を捨て、Nasolabialcyst としている。著者らの症例においては、嚢胞は、鼻前庭部⁶³⁾に存在し、いわゆる、歯槽部との関連性は稀薄であり、さらに、本症の成因においてもなお統一された見解をみない現在、鼻前庭嚢腫(胞)の名称に左袒するものである。

結 語

53才、女性に発生した、典型的な鼻前庭嚢胞の症例について報告するとともに、本邦文献上より若干の統計的考察を試みた。

文 献

- 1) Bartural. : Quiste en la fassa nasale. Semons. Zbl. 8 : 373 1892. 20) 小島, 江島より引用。
- 2) Zuckerkandl, E. : Anatomie der Nasenhöhl Bd. 1, S. 250, 1893. 20) 小島, 江島より引用。
- 3) Zarniko, C. : Krankheiten der Nase u. des Nasenrachens. III Aufl. S. 433. 1910.

- 4) Blumenthal. A. : Ueber Zysten im Bereich des Vestibulumnaris. Z. Ohrenheilk 68 : 60 1913.
- 5) Kofler, K. : Ein Fall von Schleimhaut zyste des Nasenbodens. Mschr. f. ohrenheilk 50 : 405 1916.
- 6) 久保猪之吉 : 上顎粘液腺嚢腫(新称)に就て。大日耳鼻会報 26 : 429 1920.
- 7) Brüggemann. A. : Zysten als Folge von Entwicklungsstörungen im Naseneingang. Arch f Laryng 33 : 103 1920.
- 8) Klestadt, W. : Embryologische und litschische Studie zur Genese der Gesichts spalten cyste und ähnlich Gebide. Z. Ohrenheilk 81 : 330 1921.
- 9) 石井 正 : 鼻前庭外側粘膜下に生じた線毛円柱上皮嚢腫知見。大日耳鼻会報 33 : 328 1927.
- 10) Döring. E. : Ueber Nasen vorhof zysten. Arch Ohr-usiv Heilk 117 : 138 1928.
- 11) Schroff. g. : Unusual cyst in the maxilla, cyst of nasopalatine duct and fissural cysts. D Item Int 51 : 109 1929.
- 12) 林 成夫 : 鼻底部粘液腺嚢腫に就て。耳喉 6 : 921 1931.
- 13) 高橋武雄 : 左側顔面知覚異常を惹起せる巨大なる上顎粘液嚢腫知見。口病誌 5 : 54 1931.
- 14) 小野文彦 : 鼻前庭嚢腫。歯科医学 5 : 1 1934.
- 15) 菊池三通男 : 鼻底部粘液嚢腫の1例。耳喉 8 : 413 1935.
- 16) 稲川俊吉 : 鼻底部粘膜下に生ずる線毛円柱上皮嚢胞の1例。大日耳鼻会報 41 : 1124 1935.
- 17) 加藤二郎 : 本邦文献に現われた上顎粘液腺嚢腫(鼻前庭嚢腫を含む)の統計的観察。東京医事新誌 2927 頁, 1086 頁, 2928 号, 1156 頁, 1935.
- 18) 河合郁二 : 鼻庭部粘液腺嚢腫の1例。大阪医事新誌 7 : 1503 1936.
- 19) 前川重和 : 両側鼻前庭嚢腫。東北医学会誌 27 : 204 1940.
- 20) 小島 録, 他 : 鼻前庭嚢腫。大日耳鼻会報 46 : 1000 1940.
- 21) 前川重和, 他 : 巨大なる球状上顎嚢腫の希有なる1例。大日本歯科医学会誌 38 : 293 1941.
- 22) 久保隆一 : 両側に発生せる上顎粘液腺嚢腫(会)。大日耳鼻会報 49 : 264 1943.
- 23) Miller, J.B. and Moore, P.M. : Nasoalveolar cysts. Ann. Otol 58 : 200 1949.
- 24) Montreuil, F. : Cyst of nasal vestibule. Ann Otol 58 : 212 1949.
- 25) 梅村正道 : 鼻前庭嚢腫症例及びその統計的観察。耳喉 22 : 301 1950.
- 26) 不破成和 : 鼻前庭嚢腫。日耳会報 56 : 422 1953.
- 27) 笹木 実 : 粘液嚢腫。Mucoid(鼻前庭嚢腫 Nasenvorhof cyste, 顔裂孔嚢腫 Gesichtsspalten cyste, 上顎粘液腺嚢腫(久保) Schleimdrüsen cyste des oberkiefersnach Ino. Kubo.). 日耳鼻科全書 1955, 2. 4. 219 頁。
- 28) 中嶋千磨他 : 鼻前庭嚢腫の2例。(会)。日耳会報 58 : 1049 1955.
- 29) 市原鶴子 : 鼻前庭嚢腫の2症例。東京女子医大誌 25 : 43 1955.
- 30) 佐藤靖雄, 他 : 鼻前庭嚢腫3症例。耳喉 28 : 598 1956.
- 31) 松本 明 : 鼻前庭嚢腫症例。耳鼻臨床 50 : 188 1957.
- 32) 大沢寛, 他 : 鼻前庭嚢腫症例。(会)。日耳会報 60 : 125 1957.
- 33) 関 忠道 : 鼻前庭嚢腫症例。(会)。日耳会報 60 : 134 1957.
- 34) 三吉康郎, 他 : 巨大なる鼻前庭嚢腫の1例並びにその統計的観察(会)。日耳会報 60 : 156 1957.
- 35) 鈴木盛明, 皆川武夫 : 鼻前庭嚢腫症例。耳鼻と臨床 4 : 296 1958.
- 36) 増田 守 : 鼻前庭嚢腫症例(会)。日耳会報 61 : 221 1958.

- 37) 飯野一夫：鼻前庭嚢腫の1例(会). 日耳会報 61:225 1958.
- 38) 梅林正道：鼻前庭嚢腫症例(会). 日耳会報 61:312 1958.
- 39) 中島雪夫：鼻前庭嚢腫の2例. 大阪医大雑誌 18:192 1958.
- 40) 横矢幹雄, 他：鼻齒槽嚢胞 (Klestadt 氏嚢胞) の1例. 口外誌 6:331 1960.
- 41) 河合幹, 他：鼻前庭嚢胞の1例. 口外誌 7:102 1961.
- 42) 伊集院健：鼻齒槽嚢腫症例(会). 日耳会報 64:1166 1961.
- 43) 郡 忠昭：両側性鼻前庭嚢腫の2例. 耳喉 34:1139 1962
- 44) 富永泰栄, 他：Klestadt cleft cyst (会). 日耳会報 66:641 1963.
- 45) 岡田孝, 他：鼻齒槽嚢胞の3症例について. 口外誌 10:292 1964.
- 46) 渋井弘一, 他：鼻前嚢胞の1症例及びその発生原因の考察. 耳喉 37:513 1965.
- 47) 加藤良六：鼻前庭嚢腫の1例(会). 日耳会報 72:2025 1969.
- 48) 久野吉雄, 他：鼻齒槽嚢胞の2症例について. 日口外誌 16:406 1970.
- 49) Rosen, M. D: Naso-Alveolar cyst. OS OM OP 14:149 1961
- 50) Atterburg, R. A., et al: Nasoalveolar cyst. OS OM OP 14:769 1961.
- 51) Bhasker, S. N.: Synopsis of Oral Pathology. C. V. Mosby Co., St louis. 1969. p. 205-224.
- 52) Thoma, K. H.: Oral Surg. 5 ed. C. V. Mosby. Co, St louis, 1969. p. 917-924.
- 53) 医学大辞典. 13 版, 南山堂, 東京, 1970 年 122 頁.
-